クールビズ！？女子だけ下半身だけTパックでスカートなしで登校することになった学校

私は中学3年生の平尾雛。今日の朝、私は制服のブラウスだけを着て家を出た。

下は白のTバック一枚。スカートもショーツも一切着けていない。おしりは完全に丸出し。

こんな格好で外に出るなんて信じられなかった。恥ずかしさで足がすくみそうになる。校則によりクールビズが導入された私の学校では、7月は女子生徒は下半身はTバックのみで登校しなくてはならない。決まりだから、従うしかなかった。

駅までの道、通りすがりの男子高校生たちが私を見て立ち止まった。

「うわ、マジでおしり丸出し……」

「エロすぎだろ」

小声で囁き合いながら、じっと見つめてくる。ある男子はズボンの前を少し押さえていて、勃起を隠そうとしているのがバレバレ。視線が身体に突き刺さる。

校門では担任の山田先生が立っていた。

「おはよう。ルールはちゃんと守ってるな」

先生の視線が私の股間とおしりを見てから頷いた。私は唇を噛んで校舎へ急いだ。他の女子生徒たちも次々と到着し、美咲は顔を赤らめて俯き、彩花は唇を震わせながら入ってくる。彼女たちの羞恥心が痛いほど伝わる。男子たちは門の近くで私たちを見るなり息を呑み、興奮した目で凝視する。

教室に入ると、男子全員の視線を一気に感じた。

隣の席の佐藤くんは目を丸くして固まっている。ズボンの前がぴんと張っていて、興奮を隠しきれていない。勃起しているのが

一目でわかる。「お、おはよう……雛……」声が震え、視線は私の股間とおしりを往復している。他の男子たちも同様で、田中くんは後ろの席で友達に小声で囁き、興奮を抑えきれずに股間を押さえている。次に彩花が入ってくると、彼女のおしりを凝視し、息が荒くなる。彩花は恥ずかしそうに席に座り、顔を赤らめて俯く。その次に入ってきた美咲は少し堂々と振る舞おうとするが、顔が真っ赤で羞恥心が隠せない。